

学会誌の飛躍的な質的向上は可能か？

伊藤 一秀

九州大学 総合理工学研究院

室内環境学関連の研究分野に限定しても、研究成果(論文)の投稿先は多様である。IF(インパクト・ファクター)が10を超えるトップ・ジャーナルから存在すら知られていないジャンク・ジャーナルまで、通常はカスケード的に投稿先を変えながら、少しでも有力なジャーナルへの掲載を目指す。被引用回数を増やすためにはオープン・ジャーナルに一定のメリットがあるため、非常に高価な掲載料を支払うことも厭わない(もしくは仕方がないと諦める)。アカデミアの共通言語は英語に集約されているので、引用されない日本語での論文執筆にはモチベーションが上がらない。

これは、室内環境学会に所属する過半の会員諸兄姉の状況と立場であると推察されるが、自身の状況を鑑みても、多分、それほどの外れでは無いと思う。

さて、室内環境学会の学会誌である「室内環境」の編集委員を担当して5年以上になる。編集委員といってもヒラ委員なので、たまに投稿される原著論文の査読委員やら校閲委員やらを担当するのが仕事である。この「室内環境」誌であるが、投稿される原著論文の過半は日本語で執筆されており、投稿料(掲載料)は無料!である。しかしながら電子ジャーナル化されていないので、基本的に学会誌を購読していなければ、論文を読むことが出来ない上、年に2回の発行なので、研究成果の迅速な発表という点では多少物足りないかもしれない。「室内環境」誌は所謂エディター制を採用しており、アソシエイト・エディターの他、査読者は2名以上、貴重な投稿論文は出来る限り採用否にしないように、非常に丁寧に査読(校閲?)・助言し、採否決定後には査読者の名前も公表する(当然、査読料など無く全てボランティア)。

この「室内環境」誌はジャーナルのカスケードシステムの中でみれば、多分最下層、乱流現象に例えればコルモゴロフのマイクロスケールから熱として散逸するギリギリのところまで踏ん張っている、というのが実情と感じる。現在、川崎たまま編集委員会委員長のもとで、この現状を打破し、「室内環境」誌の

飛躍的な質的向上、更には社会的評価の向上を如何にして達成するか、議論を行っている。

全く別の国際ジャーナルのエディターを担当していることもあり、先日、WileyのExecutive Seminarというものに(ほぼ強制)参加した。自身がエディティングするジャーナルに良質の論文を集め、IFを向上させ、アカデミアに貢献する(結果としてWileyが儲かる)ための様々な方法が紹介され、そして暗に実行を強制された(と感じた)。Wileyの調査によれば、2名の査読者を確保するためにエディターは平均4.5名に査読を依頼し、一人の査読者が1ヶ月に査読する平均論文数が2件であり、1論文あたりの査読の所要時間は5時間以上で、多忙を理由に査読辞退する研究者の割合は46%であること、等が報告され、掲載論文の被引用回数を増加させるためには、高名な研究者による論文投稿、特に総説論文を募ることが重要で、特に良質の論文は年の初めに掲載し、高名な研究者にゲスト・エディターを依頼して特別号を企画する、といった姑息な技も伝授された。

そもそもIFを獲得するためには年間40本の論文を出版していることがThomson Reuters (現在は買収されてClarivate Analytics)に収載申請できる最低条件である。年に2回発行の「室内環境」誌ではそもそも年間40本もの論文を掲載する余裕は無いし、これが年に3回発行になっても大差ない。会員諸兄姉の中で「室内環境」誌の英文化を強く期待する割合は低いと思われ、多分、日本語での発信にこそ「室内環境」誌の生きる道があるようにも感じる。ここは、一旦グローバル化の流れに背を向けて、室内環境に関連する国内産業と国内問題に特化しては如何であろうか。

思い切って、ローカルに特化したジャーナルも素敵だと思うのだが…